

明日の記憶

2006(平成18)年2月27日鑑賞<東映試写室>

★★★★



監督＝堤幸彦／原作＝荻原浩『明日の記憶』（光文社刊）／出演＝渡辺謙／樋口可南子／坂口憲二／吹石一恵／水川あさみ／木梨憲武／及川光博／渡辺えり子／香川照之／大滝秀治（東映配給／2006年日本映画／122分）

……大ヒットした韓国映画『私の頭の中の消しゴム』（04年）に続く、若年性アルツハイマー病をテーマとした映画だが、この主人公は仕事・家庭の両面において円熟期にある49歳のサラリーマン。ここまでギリギリの局面になると、必然的に家族や夫婦の絆の強さが浮かび上がってくるが、「明日はわが身」と思うだけに、観ていて身につまされることがいっぱい……？ 男のあなたなら、泣きじゃくる渡辺謙の姿を観て思わず涙するのでは……？

 テーマは『私の頭の中の消しゴム』と全く同じだが……

この映画の原作となったのは、第18回山本周五郎賞を受賞した荻原浩の『明日の記憶』。主人公佐伯雅行を演ずる渡辺謙は、この原作を読んで、是非映像化したいと申し出たそうだが、それは彼自身がかつて白血病と闘った経験を持つからだろう。

今回、渡辺謙が闘う病気は、あのヒットした韓国映画『私の頭の中の消しゴム』（04年）と同じ若年性アルツハイマー病。『私の頭の中の消しゴム』では、ソン・イェジン扮する、20代の女性が若年性アルツハイマー病に侵されるという悲劇だった。しかし、この映画は、同じ若年性アルツハイマー病でも、そう診断されるのはエリートサラリーマンの道を順調に歩んでいた49歳の男性。ソン・イェジンは夫の愛情が心の支えとなったが、佐伯の心の支えになるのは、妻の枝実子（樋口可南子）。

性別や年齢によって若年性アルツハイマー病に侵される患者の症状の現れ方は

異なるが、それによって患者やその家族が被る被害の本質は同じだ。そしてまた、その描き方の視点も日韓共通。すなわち、そのポイントは家族の絆と夫婦の絆ということだ。つらいけれども、そんな設定だからこそはじめて実感できる、夫婦の絆と家族の絆をじっくりと味わってみよう。

思わず私も受診者に……

若年性アルツハイマー病の検査には、問診の他、「簡単な」と前置きされる「テスト」が実施されるらしい……。「今日は何年何月何日ですか?」「何曜日ですか?」の質問はいいとしても、「これから言う3つの言葉を覚えておいて下さい。後でまた尋ねますから」あるいはテーブルの上に、ハンカチ、ペン、名刺などを5つ並べ、これをいったん封筒で隠したうえ、「今封筒の下にあるものを答えて下さい」というテストになると、思わず私も身を乗り出して受診者に……。さらに「野菜の名前を、何でも思いつくものから言って下さい」と言われると、私も頭の中でキャベツ、レタス、人参と必死になって……。さて、私のアルツハイマー病の進行の程度は……?

こんな医者にめぐり会いたいものだが……

嫌がる佐伯を説きふせて、病院に連れて行った枝実子だったが、担当医師吉田武宏（及川光博）の問診やテスト、そして検査結果の説明に不安を覚えるのは佐伯と全く同じ。しかし枝実子が佐伯と違うのは、それまでの長い夫婦生活の中で、家庭を省みることなく仕事人間として生き続けてきた佐伯の姿を見ながら、じっと耐える術を備えていたこと。

これに対して佐伯は、これまで順風満帆の人生で、挫折を体感したことのない男。したがって、そんな佐伯が若年性アルツハイマー病と断定されたのは、死の宣告にも等しいものだった。そこで佐伯がとった行動は……? そしてそんな佐伯の行動を、まだ30代の若さながら、きっちりと吉田医師が受け止めることができたのはなぜ……?

できれば、私に対するアルツハイマー病の宣告やガン宣告においては、こんな医師にめぐり会いたいものだが……。

アルツハイマー病ってここまで……？

徐々に進んでいく記憶喪失の症状を少しでも防止するための方策として考えられることは、食生活の改善などの生活スタイルの見直しの他は、メモ用紙によるチェック。これは若年性アルツハイマー病対策に限らず、一般の仕事上でも必要な対策だが、『私の頭の中の消しゴム』でも、あるいは記憶が80分しか続かないという設定の『博士の愛した数式』（06年）でも、同じような対策がとられていた。しかし、アルツハイマー病は少しずつ進行していくため、メモ用紙による対応にも限界が……。そんな正常と異常の世界をくり返ししながら、次第に廃人同様となっていく中年男の苦悩を、渡辺謙が見事に演じている。なぜ妻が家にいないのかを忘れることによって、妻に対して「お前、外に男がいるだろう」と疑惑をぶちまけるのは、献身的に尽くす妻に対する冒涇だが、それも実は病気のなせるもの。そして遂にある時は、妻に対して暴力行為までも……。いや、それはまだいい。最後の最後にはついに……。

『ラスト・サムライ』（03年）でのカッコ良さが強くイメージに残る渡辺謙の泣きじゃくる姿を観るのは痛々しくてつらいが、それもこれも迫真の演技によるもの。そして、人間をここまでにしてしまうアルツハイマー病の恐ろしさに、ただ呆然。少子高齢化が一層進んでいく日本社会では、ひょっとして10年後、20年後はこういう姿があらゆるところに……？

登場するのは善人ばかりだが……

佐伯はバリバリの広告代理店の営業部長。彼が率いる約10名の部下からの信頼も厚い。そんな佐伯を「佐伯選手」と呼ぶ依頼者（クライアント）が、ネット企業「ギガフォース」の宣伝課長の河村篤志（香川照之）だが、彼が佐伯を十分信頼していることは言葉の端々からも明らか。また佐伯が若年性アルツハイマー病になったため、枝実子が仕事先の斡旋を依頼するのが、今は陶芸ギャラリーのオーナーとなっている同級生の浜野喜美子（渡辺えり子）だが、47歳の今も独身でいる喜美子には彼女なりの苦労も。

とにかくこの映画に登場する佐伯の部下たちや河村、喜美子その他をみても、

みんな善人ばかり……。唯一、佐伯が通う陶芸教室を開いている木崎茂之（木梨憲武）が、若年性アルツハイマー病を患っている佐伯を見て1500円の代金を二重請求するというセコイ面を見せる程度。今は自分自身もアルツハイマー病を患っている奥多摩にある工房の主人菅原卯三郎（大滝秀治）も、実にいい人。現実社会ではこうはいかないだろうが、この映画ではこういう善人たちに囲まれているだけに、佐伯とその妻枝実子の悲惨さと、絆の強さがより強く浮かび上がってくることに……。

「できちゃった婚」もいいもの……？

佐伯と枝実子の1人娘梨恵（吹石一恵）は、秋に結婚式を控えているものの既に妊娠中。いわゆる「できちゃった婚」になったことについて、佐伯も枝実子も特に文句をつけなかったようだが、その1つの原因は夫となる伊東直也（坂口憲二）が、彼女の両親にもやさしい心遣いをする好青年だったから……。伊東は設計事務所を経営する33歳の建築家という設定だが、きっとこれは姉歯問題が発生した昨年11月以前の設定だから……。つまり姉歯問題発生以前は、若き建築家というイメージが1つの理想形として存在していたわけだ。しかし、今やそれは地に堕ちてしまったはず……？

それはともかく、結婚式の時点では既にあいさつを書いた大切な原稿をトイレに忘れてしまうほどに若年性アルツハイマー病が進行していた佐伯が、原稿なしに語るあいさつは心打つもの。

さて、あと数年後、息子や娘の結婚式で、私は果たしてどんなあいさつをしていることだろう……。『できちゃった婚』になるかどうかについて、私は全然気にしていないから、子供たちも安心して……。

この張りつめた空気は一体ナニ……？

一般の映画館と違い、試写室に集まる人たちは業界関係者ばかりだから、映画鑑賞のマナーの良さは月とスッポンほどの違いがある。一般の映画館で、最近特に私が感じるのは、若いアベックの行儀の悪さだけではなく、一見して夫婦50割引で来ていると思われる年輩の男女や、時々見かける明らかに70歳を超えた、シ

ニア料金で1人で来ている人たちのマナーの悪さ。マナーの悪さの中身は、若者たちと同じ映画鑑賞中の飲み食い。

若者が飲食するのはその90%が映画館で販売されているポップコーンだが、おじさん、おばさんたちは持ち込みのおにぎりやサンドイッチ。それだけならまだいいのだが、バリバリと音のするポリ袋にいっぱい詰め込んだ食料品を次々と取り出して食べられると、迷惑千万なことこの上なし。そのうえ時々、大きな声で隣の嫁さんに対して、家の中と同じように偉そうな口調で解説している旦那も……。きっと耳が遠いので普段から声の大きいのだろうが、映画館の中ではやめてほしいものだ。

その点、試写室の観客はみんな上品で、上映中周りに迷惑のかかるような飲み食いをしている人は誰1人いない。普段ですらそんな試写室の観客が、この映画ではより一層全員がスクリーンに集中している様子がありありと……。したがって、試写室内は一種独特の張りつめた空気といっぱい……。これは一体ナニ……。それはきっと、1人1人が自分の身になって、若年性アルツハイマー病のことを考えているから……？

2006(平成18)年2月28日記

ミニコラム

さっそく MRI 検査へ……

私は昔から高血圧症。毎朝薬を飲んでいるが、同時にフィットネスクラブでの運動を続けているから何とか大丈夫。ところが、私の頭の中の消しゴムは？ 『明日の記憶』を観てそんな不安にかられた私は、最近左目の視力が落ちていることと関連づけて、MRI 検査を受ける決断をした。ベッドに横たわり、カプセルの中に入れられ、ゴーという大きな音の中で不安な時間を

過ごすこと約15分。さて結果は？ 「左視神経炎の疑いあり」と診断されたものの、脳の中は結構キレイだったらしい。こんなことなら、もっと早く受けていれば長い間もしやという不安と闘うことはなかったのにと思ったが、それは贅沢というもの。渡辺謙の姿と対比して、ただただセーフだったことを感謝しなければ……。

2006(平成18)年8月16日記